九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

最晩年のアウグスティヌスが見た世界のはるかな輝き ： 『神の国』第二二巻を視座にして、若き日に見た「美と適合」を遠望する

荒井, 洋一
東京学芸大学 ： 特任教授

https://doi.org/10.15017/2556517

出版情報：哲学論文集. 55, pp.53-81, 2019-09-28. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

最晩年のアウグスティヌスが見た世界のはるかな輝き

――『神の国』第二二巻を視座にして、若き日に見た「美と適合」を遠望する――

荒井洋一

プロローグ

人間が年を取ることほど不思議なことがあるだろうか。

私は、本日、二〇一八年九月二九日に、シンポジウムに参加してくださる方々の中でも、最高齢の者の一人として、最晩年のアウグスティヌスが見た世界をたどってみたい。

その際、「アウグスティヌスのテキストは晩年になればなるほど干からびてきて、マンネリズムに陥り、退屈になってくる」との立場も一応、想定されようが、私はその立場をとらない。

また、たとえば恩恵論の場合、初期から中期、中期から後期へと、「発展の相の下に」[1]アウグスティヌスの思想を発展史的に捉える立場も有効であり、大いに教えられるが、私は、むしろ、もっと素朴に、その根底に横たわる共通性に目を向けたい。

アウグスティヌスの晩年のテキストの細部にまで分け入り、その肉声に耳を傾けると、驚くほど若々しい、輝きに満ちた

響きが伝わってくる。

アウグスティヌスの最晩年の著作『神の国』第二一巻、二二巻（第一九巻から二二巻は四二五年から四二七年にかけての執筆）を中心に考えようとするとき、年老いて疲労困憊した光景の発見に終始することは私の本意ではなく、初期や中期の哲学的なテーマである「悪とは何か」や「悪はどこから来るのか」、「私とは何か」や「あなたとは何か」、「人間の心」cor hominis は「淵」abyssus である（『詩編注解』四一・一三）、「美の問題」や「時間論のテーマ」、それに「生と死の問題」などを最晩年のテキストの中に、できるだけはっきりと再発見することを目指している。

比喩的に言いかえると、最初期の若い姿を最晩年の年老いた姿の中に見出すことを目指しているとも言えよう。

初期の『自由意思論』や中期の『告白』を著わしたときから月日は流れるように過ぎて、今や最晩年の人生を生きるアウグスティヌスは、『神の国』という大著の後半を「神の国」と「地の国」という二つの国の起源、経過、結末の視点から、系統的に描いているが、ここでは、そのような大きな枠組みは一切、捨象して、どこまでもテキストの森の小道の奥深くにまで分け入り、アウグスティヌスの肉声に耳を傾けることにしたいと思う。

アウグスティヌスの同時代人であるヒエロニュムスの晩年には、ランプの光ではヘブライ語が読めなくなり、昼間でも、細かい文字は判読が困難になる。修道士にギリシア語の注釈を大きな声で読んでもらわなければならないことについて、ヒエロニュムスは、他人の口で咀嚼されたものを味わうようで、吐き気をもよおすと不満を漏らす（In Hiezechielem VII, prol.）。

他方、アウグスティヌスは晩年に至るまで、若い頃と同様、目も耳もほとんど完全であったと言われているので、どんなに小さな生き物でもよく見えたであろう。それとも、それは視力よりも、むしろ、彼が持つ繊細で豊かな、温かい人間性から来るものであろうか、彼は大きな生き物よりも小さな生き物にやさしいまなざしをそそぎ、いつくしむところがあった。

「神の業がいとも大いなるもの（magnum）であり、いとも驚くべきもの（mirabile）であるのは、人間においてのみならず――人間は理性的な動物であるので、他の地上的な動物たちの間では、より一層卓越しており、より一層抜きん出て

います――どんなに小さな羽虫（muscula）においても、よく注意して観察する者には、その精神が驚嘆（stupor）せざるをえなくなるほどですし、創造者への讃美を引き起こすほどです」（『神の国』二二・二四・二）。

「そのうちでより一層大きな驚異（admiratio）の的であるのは、けっして巨体の持ち主ではありません。というのは、私たちは、蟻の業や蜂の業の数々に対して、鯨の巨大な体に対してよりも大きな驚嘆の念を覚える（stupere）からです」（『神の国』二二・二四・五）。

一　『自由意思論』での問いかけ

アウグスティヌスにより「自由な意志の決定」liberum uoluntatis arbitrium の問題が、哲学の歴史上、いわば初めて本格的に提起されたというのは不思議なことであり、驚くべきことであると思う。[2]

「自由意志」の問題は、後に触れる「私とは何か」の問題と並んで、ギリシャ哲学では、あまり本格的に問われることがなかったようである。

さらに言うと、この二つの問題、すなわち、「自由意志」の問題と「私とは何か」の問題とは、深く考えるなら、相互に関連しているとも見える。

「あなたがたは信じなければ理解しないだろう。」イザ七・九

この言葉は『自由意思論』一・二・四でもはっきりと述べられているように、アウグスティヌスが、悪の問題に関して、マニ教からの離脱を成し遂げる際の、信の先行と知的な探求の後続という「順序」ordo ないし「歩み、段階」gradus を示す、導きの言葉であった。

このイザ七・九は『自由意思論』二・二・六でも、繰り返し、はっきりと引用されるきわめて重要な言葉である。また、

このイザ七・九は『自由意思論』第三巻冒頭でも、三・二・五において、暗示されているとみることができる。

これは『告白』冒頭の順序の系列[3]に照らすと、③→⑤である。

この標語は、後のアンセルムスにも大きな影響を与え、「中世哲学の原理」となったとも言われている。

「自由意志」の問題にせよ、「私とは何か」の問題にせよ、アウグスティヌスにより、いわば初めて本格的に問われたのは、神への信仰の問題が深く関係しているのではないか、と推測することができる。

たとえばこうである。

もしも神が世界を創ったのだと心の底から信じるとすると、どうしても、世界において目をそむけることのできない悪の存在への深刻な問いかけが生まれてくる。

なぜそこに悪があるのか。どこから（unde）悪は来るのか。

悪をなす（male facere）とは何か、と。

『自由意思論』一・三・六において、まず「悪しき行い」malefacta の実例がアウグスティヌスによって尋ねられたとき、エウォディウスが挙げたのは、姦淫（adulteria）、殺人（homicidia）、神聖冒瀆の行い（sacrilegia）の三例であった。

この三例は、最晩年の『神の国』二二・二二・一でも再登場するが、それについては後ほど触れよう。

悪の正体は、「悪しき行い」の外形には求められずに――戦争や死刑や過失致死などの形態もあるので――、「悪しき行い」をなす人の内面に求められる。

それは「欲情」libido、ないし「欲望」cupiditas である。

それを突きつめていくと、人の心――後に『詩篇注解』では「淵」abyssus とも言われる――の奥底の「愛」amor の問題に行き着く。

「欲望」cupiditas とは、不本意ながらも（inuitus）喪失することのあり得る事物への愛（amor）である（『自由意思論』一・

四・一〇)。

第一巻の長い対話を経て、悪をなすとは、永遠的なもの(res aeternae)をなおざりにして、時間的なもの(temporalia)を追求することである(『自由意思論』一・一六・三四)と結論される。

つまり、悪の問題は、永遠と時間の問題に関係する。

では、人はどこから(unde)悪をなすのか。

悪しき行いは一人一人の人間の自由な意志の決定から生まれてくるのである。

私たち人間は「自由な意志の決定」liberum uoluntatis arbitrium からして悪をなすのである(『自由意思論』一・一六・三五)。

この問題の当面の展開を探るためには、『自由意思論』第二巻と第三巻を丹念に読み進める必要があるばかりでなく、その後の展開を踏まえたアウグスティヌスの最晩年の思索を知るためには、四二六年に著された『恩恵と自由意思について』を正確に読み解かなければならない。

二 『告白』での問いかけ

「私とは何か」の問いかけについては、『告白』において、次のようにして、「神とは何か」の問いかけとの緊密な相互連関の形で問いかけられている。

「あなた(=神)は私にとって何であるのか。どうぞ私が言い表せるようにあわれみたまえ。私自身はあなたにとって何であるのかを。」『告白』一・五・五

Quid mihi es? Miserere, ut loquar.Quid tibi sum ipse...

この問いかけは『告白』における最重要の問いかけであろう。

いや、そう言うだけでは足りない。

この問いかけこそ、『告白』においてなされるすべての問いかけの根底に置かれる根本的な問いかけであろう。

たとえば、『告白』第一一巻における有名な時間論の問いかけ「時間とは何か」（一一・一四・一七）も、突きつめて考えると、「時間的な存在である私自身は永遠なる存在であるあなたにとって何であるのか」と問いかけているものと思う。[4]

そして、もしも「私とは何か」の問いかけが、「あなた（＝神）とは何か」の問いかけとの緊密な相互連関の形で問いかけられているなら、かならずや、あなた（＝神）と私の両者は、けっして一方的な関係の中に終始することはなく、双方向的な親しい相互関係の中にあり、「私からあなた（＝神）への愛の運動」は、「あなた（＝神）から私への愛の運動」と呼応し、緊密に相互連関して起きているはずと思う。

「私からあなた（＝神）への愛の運動」は、『告白』一・一・一において、私からあなた（＝神）へと向かって「騒ぎ立つ心」cor inquietum として表明されている。

「あなたは私たちをあなた自身に向けて造りました（fecisti nos ad te）。ですから、私たちの心（cor nostrum）はあなたの内に憩うまで、騒ぎ立ちます（inquietum）」。

inquietum（山田晶訳「安らぎを得ない」[5]）の意味は何か。

私は、山田晶訳からとともに、加藤武説からきわめて大きな教示を受けた。

――「inquietum とはなにか。それは不安であるよりもざわめきである。近代的実存主義的な「不安」や「めまい」や「嘔吐」であるよりも、激しい唸り声であり、どよもすしおざいである。[6]」。

もしも inquietum を「不安」と訳すと、次のテーマ：Angst との混同の危険が生じるので、「胸騒ぎ」や「しおざい」と訳

す方が良いと思う。

「あなた（＝神）から私への愛の運動」は、『告白』一・五・六において、「あなたが到来するためには狭い（angusta est）私の魂の家（domus animae meae）」として表明されている。

「私の魂の家（domus animae meae）は、あなたがおはいりになるには（quo uenias ad eam）、狭すぎる（angusta est）。拡げたまえ。荒れている。直したまえ。御眼にさわるものがある。認めます。知っています。けれども、だれがきよめてくれるでしょうか。あなたよりほかのだれにむかってさけんだら（clamare）よいでしょう。…」（一・五・六）（山田晶訳）。

ドイツ語でAngstというと、それは、普通、「不安」と訳される。そのため、『告白』冒頭のinquietumの訳語として、Unruheではなく、Angstが採用されることもあり得るが、それはmisleadingであると言えよう。

Angstの語源をたどると、ラテン語のangustusにたどりつく。これはきわめて訳しにくい用語であるが、右では、山田晶により「狭い」と訳されている。

『告白』冒頭の最初の地点では、「騒ぎ立つ心」cor inquietumが、私からあなた（＝神）へと向かう愛の運動において、「まだ到達していない」「まだまだ落ち着いてはいない」「もっと登高して行きたい」との積極的な働きをなしているのに対して、『告白』冒頭の最後の地点では、「狭い家」domus angustaが、あなた（＝神）から私へと向かう愛の運動において、「狭苦しくて入れない」「困窮して余裕がない」「荒涼として汚れている」との抑止的な働きをなしている。

このようにして、「騒ぎ立つ心」cor inquietumが、私からあなた（＝神）へと向かう愛の運動において語られ、「狭い家」domus angustaが、あなた（＝神）から私へと向かう愛の運動において語られているのはなぜか。

それはまさに、「騒ぎ立つ心」cor inquietumと「狭い家」domus angustaとによって挟まれた所で発せられている次の根本

的な問いかけと深く、密接に関係していると見える。

「あなたは私にとって何でしょうか（Quid mihi es）。どうぞ私が言い表せるように憐れみたまえ。この私自身はあなたにとって何でしょうか（Quid tibi sum ipse）」（一・五・五）。

『告白』冒頭の一・一・一から一・五・六までをふまえると、次のように、アウグスティヌス自身の人生が具体的に語られ始める直前において、答えられていると言える。

「私とはあなたにとって何か」というと、私とは「騒ぎ立つ心」cor inquietum であり、「狭い家」domus angusta である。

「私とは何か」という問いかけは、本来、「私はどこへ行くのか」という問いかけとともに、「私はどこから来たのか」という問いかけと密接に結びついている。

「あなたへと向かって」ad te は『告白』冒頭においてすでに語られている。

「あなたは私たちをあなた自身に向けて造りました（fecisti nos ad te）。ですから、私たちの心（cor nostrum）はあなたの内に憩うまで、騒ぎ立ちます（inquietum）」。

では「私はどこから来たのか」という問いかけは？

「私はどこからここへ来たのか知りません（nescio unde uenerim huc）。ここへ、この死的な生（uita mortalis）と言いましょうか、それとも生的な死（mors uitalis）と言いましょうか」（『告白』一・六・七）。

普通は「ここへ、この生へと」とだけ言うところであろう。

アウグスティヌスは「この死的な生（uita mortalis）と言いましょうか、それとも生的な死（mors uitalis）と言いましょうか」と微妙な言い方で、陰影を交えて言い表し、生と死を截然と分けずに、互いに交錯させている。

このようにとらえることによって、『告白』一〇・二七・三八での有名な「遅くにあなたを私は愛しました」sero te amaui

の構造をよりよく解釈できる。

「私の魂の家（domus animae meae）は、あなたがおはいりになるには（quo uenias ad eam）、狭すぎる（angusta est）。拡げたまえ。荒れている。直したまえ。御眼にさわるものがある。認めます。知っています。けれども、だれがきよめてくれるでしょうか。あなたよりほかのだれにむかってさけんだら（clamare）よいでしょう。…」（山田晶訳）と『告白』一・五・六では言われていたのに、『告白』第八巻の回心を経て、『告白』一〇・二七・三八での有名な「遅くにあなたを私は愛しました」sero te amaui と歌われる直前（『告白』一〇・二五・三六）では、はっきりと「私の魂の家（domus animae meae）」との言葉ではないにせよ、暗にそのイメージを連想させつつ、「あなたは私の記憶の中に留まっています（manere in memoria mea）」と言われ、「あなたが入るのには狭い」と言われていた「私の魂の家（domus animae meae）」は、回心を経て、ここでは、もう拡げられ、直され、清められているのである。

あなたは、その結果、私の記憶（memoria mea）の中に留まり（manere）、そこに住んでいる（habitare）のである。

ここに、アウグスティヌスの Angst は解消しているのである。

その結果、初めて、「遅くにあなたを私は愛しました」sero te amaui の歌を高らかに歌い上げることができるようになる。Angst に妨げられて、アウグスティヌスはなかなかこの歌を歌うことができなかったが、今や、Angst から解放されることによって、初めて、アウグスティヌスはこの至上の愛の歌を歌うことができるようになったのである。

後に、『神の国』二二・八の「教会の中にあるいとも栄誉あるステファノの記念聖堂（memoria）」が参照される。

すなわち、『告白』では、私の心の中の出来事だったドラマが、後に、『神の国』では、外なる世界の中で、すなわち、ヒッポの教会の中で、目に見える構造物が、すなわち、ステファノの記念聖堂が大きな役割をはたし、パウルスとパラディア（Paulus et Palladia）という兄と妹の身に起きた出来事として、リアルに、ドラマティックに表現されている。

三　『神の国』第二二巻での明暗そして明の構図

私はかつて、同じ『神の国』第二二巻を踏まえて、悪の問題に焦点を合わせて論文を書いたが、[7] このたびは『神の国』第二一巻にも視野を広げて、「明るい絵の構図」をも視野に入れた上で、世界全体と、そこに生きる人間の姿を描く、壮大なスケールの明と暗の対比の構図、そして圧倒的な明の構図に焦点を合わせて論じたいと思う。

アウグスティヌス自身によると、第二一巻においては、「悪しき者たちの刑罰」de malorum supplicio が論じられ、第二二巻においては、「正しい者たちの幸」de felicitate iustorum が論じられる、と予告されている（『神の国』二〇・三〇）。

この予告に照らすと、『神の国』第二一巻は暗であり、『神の国』第二二巻は明であることになるが、実際のテキストでは、それほど単純ではない。

『神の国』第二二巻冒頭で、「神の国において、すべての市民たちは不死の者（immortales）となるでしょう」と言われるのは、いわば予告通りである。[8]

この冒頭の一文は、以降に展開される、驚異の数々、奇跡の数々（miracula）の列挙や復活論を予告するものとなっているが、それはきわめて宗教的なテーマを含むので、九州大学哲学会の開かれる場所になじまないし、また、私は、すでに、別の論考[9]の中で全訳しているので、ここでは再掲しない。

四　私たちの「騒ぎ立つ心」cor inquietum のヒッポの教会での声また声への投影

【奇跡二〇】この物語は最初から緊密な文章により書かれている。この物語こそ、アウグスティヌスによる一連の奇跡物語

のクライマックスである。

ただ、ここに全訳することは、右の『神の国』第二二巻冒頭の一文と同様、内容がきわめて宗教的な奇跡物語なので、差し控える。私は全訳を、右の論考[9]に掲載したので、もしも参照していただければ幸いである。

そのうちの必要最小限のテキストだけ訳出すると、或る日のヒッポの教会では、耳を聾するばかりのどよめきに会衆全員が騒ぎ立っている。

「彼らは神をたたえて、言葉もなく、声だけを上げつつ（uoce sine uerbis）欣喜雀躍しました（exultabant）。私たちの耳がかろうじて持ちこたえることができるくらい、わんわんとどよめきわたりつつ。欣喜雀躍する彼らの心の中にあったのは、キリストへの信仰以外の何だったでしょうか」（『神の国』二二・八）。

ここで、私には、『告白』での「騒ぎ立つ心」cor inquietum（『告白』一・一・一）がありありと思い起こされる。

そしてまた、同所での「あなたは私たちをあなた自身に向けて造りました（fecisti nos ad te）」も併せて。

この物語には絵画的な面もないではないが、もっとはっきりと音楽的であり、ドラマティックである。

『告白』と『神の国』第二二巻とでは、執筆の時期は四半世紀ほど隔たっている。

その間、ペラギウス派との論争などを経て、アウグスティヌスの思想はより一層豊かになり、発展していった面もあるが、アウグスティヌスの基本線、中心線は少しも変化していないように見える。

もしもそのような見方ができるとすると、『告白』冒頭の根底を形成する構図により、『神の国』第二二巻での明暗そして明の構図を解明できるのではないか。

すなわち、「私とはあなたにとって何か」というと、私とは一面からは、「騒ぎ立つ心」cor inquietum（『告白』一・一・一）であり、他面からは、「狭い家」domus angusta（『告白』一・五・六）であると答えられていたと解釈することによって、『神の国』第二二巻での、一見、唐突で、急激で、非連続のように見える明から暗、そして暗から明への変化の構図が解明でき

るのではないかと思う。

すなわち、暗い絵の数々は、「狭い家」domus angusta（『告白』一・五・六）の光景を描いたものとして解釈できると思う。

五「私の魂の狭い家」angusta domus animae meae の映像

『神の国』二二・八では、こんなにまでも高らかに、また力強く神への讃美が言葉と声によって表明されていたというのに、『神の国』二二・二二から、がらりと明から暗へと構図が反転して、きわめて多種多様な悪の形態が語られるのである。

なぜ構図は明から暗へと反転するのか。

『神の国』第二二巻のテキストの小道に深く分け入り、丹念に読み進める者の目には、はっと驚かされるほど急激に暗転している。

そこでは、「この生（uita）が、もしも生であると言われるべきであるとしたら」（『神の国』二二・二二・一）、とか、または、「この悲惨な、あたかも或る種の地獄（inferi）のような生（uita）」（『神の国』二二・二二・四）とも言われている。

これは、『告白』の用語で言い表わすと、「この死的な生（uita mortalis）」、または「生的な死（mors uitalis）」（『告白』一・六・七）と言い換えられると思う。

このような生（uita）の在り方は、あの日のヒッポの教会での、喜びに沸き立つ生、跳び上がって、跳びはね、踊り出して喜ぶ（exultabant: exultare）生とはまるで、昼と夜、天国と地獄。喜びと悲しみ、熱気と冷気、希望と絶望のように好対照である。

両者は同じ生なのであろうか。

明るい絵の後に、暗い絵はなぜ描かれたのだろう。

「暗い絵」とは、この生における「悪の数々」mala、「この生の悪の数々」mala huius uitae（『神の国』二二・二三）――複数形に注意――を描く絵であり、「明るい絵」とは、この生における「善の数々」bona――複数形に注意――を描く絵である。

この範囲内において、テキストには実にしばしば名詞の複数形が使用されるので、極力、ラテン語も添えて訳出した。これは次々に列挙していくこととも密接に関連することであるが、複数性はきわめて明白な特色である。

「明るい絵」の中で、アウグスティヌスは、初めは淡々と助走していくが、時には、なぜかグロテスクなほど極端で残酷とも言える事例も交えつつ、しだいにスピードを上げていって、最後は全力疾走に移る。文体も文章構成も入念に練り上げて、『神の国』二二・八でクライマックスに至る。このクライマックスを目指して、アウグスティヌスの奇跡物語は組み立てられている。

まるで、ホップ＋ステップ＋ジャンプの三段跳びのように、最後のジャンプのところで、アウグスティヌスは全力をつくして、強く、高く、天に向かって跳躍していく。

アウグスティヌスのドラマティックな話法がよくわかる展開となっている。

「私たちのもとでなされた一つの（unum）奇跡がありました。それは、私がすでに述べたよりも大きな奇跡というわけではありませんが、あまりにも輝かしく（clarum）、かつあまりにもまばゆい（illustre）奇跡（miraculum）なので、ヒッポの住民なら、だれも、この奇跡を見なかったとか、あるいはまた、耳にしなかったとか、という人はいないと思われますし、だれも、何らかの理由で、忘れることができるなどという人もいないと思われます」（『神の国』二二・八）。

傍線部で示したように、これはまぶしいくらいに「明るい出来事」であることが強調されていると解釈できる。

末尾付近の「欣喜雀躍しました（exultabant）」がそれを一言で言い表している。

先の引用を再掲する。

「彼らは神をたたえて、言葉もなく、声だけを上げつつ（uoce sine uerbis）欣喜雀躍しました（exultabant）。私たちの耳

がかろうじて持ちこたえることができるくらい、わんわんとどよめきわたりつつ。欣喜雀躍する彼らの心の中にあったのは、キリストへの信仰以外の何だったでしょうか」（『神の国』二二・八）。

その後に永遠の生命へと至る復活論が展開され、これ以上はないくらい「最も明るい絵」が描かれる。

ところが、その直後に、すなわち、まばゆいばかりの永遠の生命へと至る方向性を垣間見た直後に、急転直下「暗い絵」が描かれるのである。

【明るい絵】（→【最も明るい絵】）→【暗い絵】→【大きな暗い絵】→【輝く暗い絵】→【明るい絵――人間の営為】→【明るい絵――慰めの数々（solacia）】

右に示したように、反転し、さらにまた反転する構図を私は別の論文[10]で解明したので、ここでは再論しない。

ここでは、ただ、傍線部への展開に注目したい。

すなわち、「暗い絵」から「明るい絵」への展開に注目したいと思う。

ここで、このシンポジウムのもう一人の提題者・森泰男先生が、このたび、山田望先生の『キリストの模範――ペラギウス神学における神の義とパイディア』教文館、一九九七年に基づいて、ペラギウス論争を取り上げている[11]ことに応じて、私は予定変更して、即興演奏を試みる。

かつて山田望先生は、『キリストの模範』の中で、アウグスティヌスとペラギウスの関係をめぐって、宮谷宣史先生のとらえ方を手厳しく批判したことがある（四四～四六頁）。

以下には私の推測も含む。

内外の研究文献に精通していた宮谷先生は必ずや山田望先生の批判をお読みになったことだろう。

でも、山田望先生の書から七年後に出版された御著書「アウグスティヌスにおける悪の問題」『悪の意味――キリスト教の視点から』新教出版社、二〇〇四年の中で、宮谷先生は、あからさまには反論せずに、ただ、おだやかに、J．ヒックの「エイレナイオス型神義論[12]」に触れつつ、次のように言う。

「アウグスティヌスにおいて、悪のなかにありながらも、人間が精神活動により、進歩し、成長していく面を重視しているゆえに、この側面を無視して、簡単に決めつけることはよくない」（一八二頁）。

宮谷先生の若いころからの親しい友人の一人であり、西南学院大学ではもちろん、九州大学でのアウグスティヌスの関係文献の網羅的な調査にも、宮谷先生のために積極的に協力された森泰男先生は、学会や本の中でしか知らない私よりも宮谷先生の人柄をはるかによく知っているだろう。

宮谷先生は、おそらく、ペラギウスをエイレナイオスになぞらえて、ヒックを批判するという形で、暗に反論したのではないか。

私も、かつて、ヒックの別の書を批評したことがある[13]。

ヒックは、宮谷先生の言うように、悪の問題に関して、アウグスティヌス型とエイレナイオス型という二つの類型があると、はっきり分ける。

アウグスティヌス型では、原罪とのかかわりにおいて、悪の問題を、人間の堕落と自由意志との問題としてとらえるがゆえに、人間が置かれている状況を悲観的にとらえる伝統が展開される。

他方、エイレナイオス型では、人間がしだいに成長し、進歩していく面に注目するので、悪の問題についても、楽観的に、前向きにみる傾向を示す、とされる。

宮谷先生は、この二つの類型化が極端であり、アウグスティヌスの実像に即していないと考えるのであろう。

一般に、論争においては、どうしても論敵を類型化しがちであろうが、私自身も自戒しつつ、今は他界された宮谷先生の

立場に思いをいたし、右の構図の【輝く暗い絵】→【明るい絵――人間の営為】→【明るい絵――慰めの数々（solacia）】のところで、実際のアウグスティヌスのテキストに即して「悪のなかにありながらも、人間が精神活動により、進歩し、成長していく面」に注目していきたい。

さきほど提起した問題をここに再掲する。

明るい絵の後に、暗い絵はなぜ描かれたのだろう。

それは、けっして、暗い絵を描くことに終始するためではなく、ひとえに、暗い絵の後に明るい絵を最後に描くためである。アウグスティヌスの構想では、あたかも絵巻物のように、初めは「明るい絵」の数々をホップ＋ステップ＋ジャンプの三段跳びのように、次々に見せていき、ついには永遠の生命へと至る「最も明るい絵」を見せておいてから、悲しいかな、見ている私たちが依然としてまだ「暗い存在」であることに視線を向けようとしている。

「私たちはこのことを、罰をこうむる私たちの醜さにおいて（in nostrae poenae deformitate）、経験しています」（『神の国』二二・二二）。

この『神の国』二二・二二では、「罰をこうむる私たちの醜さ（nostra deformitas）」と対比して、詩篇二六・八を引用して、「主よ、私はあなたの家の麗しさ（decus domus tuae）を愛しました」と語られている。

すなわち、「（罰をこうむる）私たちの醜さ（nostra deformitas）」と、「あなたの（家の）麗しさ（decus domus tuae）」とが明確に対比されている。

「醜」deformitas と「麗しさ」decus、または「美しさ」pulchritudo の対比の視点は、『神の国』第二二巻において最重要の視点と言えると思う。

【暗い絵】『神の国』二二・二二・一

悪をなす（male facere）とは何か。

『自由意思論』一・三・六において、まず「悪しき行い」malefacta の実例がアウグスティヌスによって尋ねられたとき、エウォディウスが挙げたのは、①姦淫（adulteria）、②殺人（homicidia）、③神聖冒瀆の行い（sacrilegia）のわずかに三例であった。この三例は、最晩年の『神の国』二二・二二・一でも現れるが、一般にキリスト教思想に見られる悪の列挙にも影響されつつ、またアウグスティヌス自身が目にし、耳にした出来事からも汲み取りながら、まるでアウグスティヌスが長く生きてきた年輪のように、三例の周囲をきわめて多くの悪の数々が取り巻いている。[14]

けれども、悪の根元に「愛」が、「倒錯した愛」が置かれている点は『自由意思論』と変わらない。

ただし、その状況は、『神の国』では、もっと掘り下げられて、「恐るべき無知の深淵」[15] horrenda profunditas ignorantiae と描写されている。

【大きな暗い絵】『神の国』二二・二二・三の後で描かれる【輝く暗い絵】『神の国』二二・二三

『神の国』二二・二三では、「正しい者たち」iusti のみに固有な「労苦の数々」labores が語られている。

『神の国』二二・二三は、「正しい者たち」の落とす影が強調された、「暗い絵」である。

「正しい者たちは労苦を持って悪徳に対する（aduersus uitia）兵役に服する（militare）のであり、このような戦闘（proelia）の試練の数々（temptationes）と危険の数々（pericula）の中にさらされるのである」。

この「戦闘」は対他的な側面も持つであろうが、テキストでは、むしろ、対自的な側面が強調されている。それを内なる戦闘と言ったらよいだろうか。

「肉（caro）は霊（spiritus）に対立して欲情すること（concupiscere）をやめないし、霊は肉に対立することをやめない

ので、その結果として、私たちは、けっして、あらゆる悪しき欲情（concupiscentia mala）を滅ぼしつくすことによって、私たちが意志する（uolumus）ことをなす（facere）、などということにはならないが、神の助けを得て、私たちに可能な限り、悪しき欲情に同意（consentire）しないことによって、悪しき欲情を私たち自身に従属させる（subdere）べきなのである。絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）」（『神の国』二二・二三）。

ここから否定の命法による列挙が始まる。

「絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）」には十分注意すべきである。アウグスティヌスの気分において、ここはまだ「夜の世界」であるということが、この言葉遣いに反映されている。

アウグスティヌスの文章は流れるように続いていて、途中で切ることが難しいし、別の論考において、私は詳述したことがあるので[16]、ここには再掲しないつもりであったが、もう一人のシンポジウムの提題者・森泰男先生のテーマ：ペラギウス論争との関係から、恩恵を浮かび上がらせるため、或る程度の必要な範囲内で、重ねて引用する。

しばらくして手短で簡潔な列挙の数々は終わり、少し長文の列挙のクライマックスに至る。ここでの、短文から長文への移行は要注意である。

すなわち「この労苦の数々（labores）と危険の数々（pericula）に満ち満ちた戦い（bellum）の中で、いつか、私たちの力（uires）によって勝利（uictoria）が達成されるはずなどと希望（sperare）されないようにと、そしてまた、達成された暁にも、けっして、私たちの力に勝利が帰せ（tribuere）られないようにと。そうではなく（sed）、勝利は神の――その神について使徒パウロは次のように言う。すなわち「私たちの主、イエス・キリストを通して、私たちに勝利を与える神に感謝せよ（gratias Deo）」（Ⅰコリ一五・五七）。また使徒パウロは他の箇所でも言う。すなわち、「私たちをいつくしんだ（dilexit）方を通して、私たちは、これらすべてのことにおいて、圧勝を収める（superuincimus）」（ロマ八・三七）――恩恵（gratia）に

帰せられるべきである」（『神の国』二二・二三）。

ここで注目すべき点がある。

右の引用でのIコリ一五・五七も、またロマ八・三七も、『恩恵と自由意思について』七の中で、共に引用・参照されているとの事実である。それは、恩恵と自由意志の関係について、アウグスティヌスが語り明かす最重要の箇所である。

ということは、いわば逆算すると、この『神の国』二二・二三でも、明瞭に語られてはいないにせよ、人間の自由意志が行使されているということができよう。

その最後の一文にも十分注目すべきである。「私たちの力に勝利が帰せられないようにと（ne...uiribus nostris facta tribuatur）」までが、延々と続く、否定の命法（ne..., ne..., ne...）による列挙の数々である。そして、最後の一文のみは肯定の命法（sed...）によっている。「勝利は神の――その神について使徒パウロは次のように言う（Iコリ一五・五七）（ロマ八・三七）…――恩恵（gratia）に帰せられるべきである」。

延々と列挙される短文による否定の命法の数々から比較的に長文による否定の命法へ、そして長文による否定の命法から肯定の命法へと、使徒パウロの言葉とも見事に共鳴しつつ、まことにドラマティックに続く。

『神の国』二二・二二から二四までの範囲内で、クライマックス的な構文を持つのはここだけである。

それはなぜか。

それは、この『神の国』二二・二三においてこそ、アウグスティヌスその人がいるからではないか。他のすべての列挙の場面では、アウグスティヌスは、まさに絵のように見て、描いているのに対して、この箇所のみは、実は、絵ではなく、ここでは、アウグスティヌスはみずからの生（uita）を、自画像のように描いているというよりも、生き生きと語っているのではないかと私は思う。

自由意志とは何か。

また恩恵とは何か。

そして自由意志と恩恵との関係はいかに。

この問題を真剣に考えようとするとき、どうしても私たちは両者の関係をメカニックに、外から、または上からとらえてしまう。

けれども、この『神の国』二二・二三の最高のテキストにおいては、どうか。

私たちの力（uires）の限りを尽くした先に、目を凝らしてみると、見えてくるものがある。

「絶え間なく（continuae）徹夜して（uigiliae）、夜通し警戒の目を見張りつつ（excubare）」というのであるから、あたりはまだ夜である。

けれども「夜通し」と言えるのであるから、夜明けが近いともいえる。朝日がもうすぐ昇ってくるとも。

恩恵（gratia）は真夜中においても働いているが、勝利の暁においてこそ、朝日の輝きを浴びつつ現れてくる、と暗示されているように見える。

実際に、この【輝く暗い絵】の後には、【明るい絵――人間の営為】、【明るい絵――慰めの数々（solacia）】と、明るい絵の数々が描かれるのである。

アウグスティヌスの姿を、ペラギウスとの対比で浮かび上がらせようとするとき、「最後の最後に明るい絵に到達する」との、ドラマティックとも言える事実は、いくら強調しても、強調しすぎることはないだろう。

【明るい絵――人間の営為】『神の国』二二・二四・三の後に描かれる【明るい絵――慰めの数々（solacia）】『神の国』二二・二四・五

私は最後に、『神の国』二二・二四・五にたどり着く。

それを「美しい絵」に例えたらよいのか。または「静かな音楽」に。

そこでは、中期の『告白』一〇・二七・三八での甘く、激しく、熱く響く「遅くにあなたを私は愛しました」sero te amaui とは好対照の、静かな、透明な、安らぎに満ちた讃歌がかなでられている。

ヒッポの教会の外で、アウグスティヌスが見ていた最晩年の景色は、まさにこのような光景ではなかったろうか。

私は別の論考[17]で詳しく引用したことがあるので、あえて繰り返したくはないが、ここでは『神の国』二二・二四・五からごく一部だけ引用しよう。

古代末期において、海の光景を描くのは珍しいことのようなので、特に注目してほしい。

「被造物（creatura）のその他の美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）は見て取られます。天と地と海の千変万化の美しさ（pulchritudo）において、太陽と月と星のあふれるほどの光（lux）それ自身とあんなにも驚くべき（mirabilis）光景（species）において、うっそうと茂る木々の陰において、咲きほこる花の色と香りにおいて、多くの、さまざまな鳥たちのさえずりと色彩において、これほど多くの、これほど大きな（tot et tantae）生き物たち（animantes）の種の多様性において――そのうちでより一層大きな驚異（admiratio）の的であるのは、けっして巨体の持ち主ではありません。というのは、私たちは、蟻の業や蜂の業の数々に対して、鯨の巨大な体に対してよりも大きな驚嘆の念を覚える（stupere）からです――、あたかもさまざまな色の衣装を身にまとうようにして、或る時は緑でありつつも、時々刻々と濃淡を変え、或る時は紫の、また或る時は紺碧の姿を見せる海（mare）自身のこれほど壮大な光景（spectaculum）においても。さらにまた、海が荒れ狂う折の景色すら、何と面白く眺められることでしょう。それがより一層の甘美さ（suauitas）をかもし出すのは、みずからが投げ飛ばされたり、揺り動かされたりする船乗りの立場でではなく、眺める者の立場で魅了されるからです。

飢餓に対抗して、食べ物は、至る所に、何と豊富にあることでしょう。嫌気に対抗して、味わいは何と多様であること

でしょう。それは、自然の豊饒によって注ぎ出された多様性（diuersitas）ですし、けっして、料理人の技芸と労苦によって求められた多様性ではありません。何と多くの物において、健康を維持し、回復する手立てがあることでしょう。かわるがわるに訪れる昼と夜の交替の何と快いことか。涼しい風（aurae）の何と心地よいことか。植物の実と動物においては、衣服を織り成すための何と大いなる素材（materies）があることでしょう。これらすべてを一体だれが列挙（commemorare）できましょう」。

ここでは、あたかも、世界全体が輝いているかのようである。それは存在の輝き、生命の輝きに似ている。それは人に与えられた「慰めの数々」solacia としての「善の数々」（自然的な善）である。

「被造物（creatura）のその他の［身体以外の］美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）の列挙」（『神の国』二二・二四・五）の視点が一体どこにあるのかを見極めようとするとき、「こうむる悪」の視点から語られる傍線部のテキストが好一対となって、ヒントを与えてくれていることに気づく。

ここでは、世界を「眺める者の立場」から、また世界に耳を澄ませる者の立場からも、「海が荒れ狂う折の景色すら」、面白いと言われているし、また「かわるがわるに訪れる昼と夜の交替」においては、夜それ自体でさえも、快いと言われている。『告白』において、あんなにも迫力満点に、「私とは何か」と問い、「あなた（＝神）とは何か」と問いかけたアウグスティヌスが、ここでは、ふだん見慣れた世界を前にして、ありふれた風景や光景、情景の奥底に潜む原初の輝きを透徹したまなざしによって眺める者として、味わい深く、含蓄の深い言葉によって、静かに、たぶん微笑みながら語るのである。

それは、もちろん、あんなにも「暗い絵」を描くことのできた人にだけ描けるような「明るい絵」であると言ってよいのだろう。

アウグスティヌスは、けっして、「暗い絵」を描くことに終始する人ではなく、「暗い絵」の向こうに「明るい絵」を、加齢と共に熟成し、深く豊かに成長していく信仰と知恵によって、描こうとした人であったと私は思う。

この絵を見ていると、そのすばらしさに心を奪われるが、ふと思う。

この絵の中には、被造物の数々が――木々も、花も、鳥も、蟻も、蜂も、鯨までもが描かれているのに、有用性（utilitas）にかかわる料理人を除いて、人が描かれていないと。

かわいらしい子供たちや優しく見守る母、それに若く美しく躍動する青年たちを描くのは、アウグスティヌスの構想する「被造物（creatura）のその他の美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）」の構図に照らして、適切ではないと思われたのか。

生き生きと、激しく躍動する人間の姿なら、『神の国』二二・八において、見事に描かれている。

すなわち、前述したように、或る日のヒッポの教会での、耳を聾するばかりのどよめきと共に、会衆全員が騒ぎ立つ姿が描かれているのである。

でも、美しい人の姿は『神の国』第二二巻のどこに？

最後に、この問題に焦点を合わせて、アウグスティヌスが最晩年に見た「美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）」について、コメントする。

思えば、『神の国』第二二巻では、通奏低音のように、美のテーマが随所[18]で鳴り響いていたように思う。

「醜」deformitas と「麗しさ」decus、または「美しさ」pulchritudo の対比の視点は、『神の国』第二二巻において論じられる様々な問題の根底を形成する最重要の視点と言えると思う。

「美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）」、「美しさ（pulchritudo）と有用性（utilitas）」と何度も繰り返して音読していると、いつしか音響が記憶の中でスライドして、「美しいもの（pulchrum）と適合するもの（aptum）」、「美（pulchrum）と適合（aptum）」と繰り返して音読していることに気づく。

『美と適合について』De pulchro et apto

記憶の中で、遠く、はるかに思い起こされるのは、アウグスティヌスが、三一歳の回心よりも前の二六歳か二七歳の年に生まれて初めて書いたという、「二巻か三巻の」処女作『美と適合について』De pulchro et apto である。[19]

アウグスティヌスは『告白』において、この処女作について「二巻かまたは三巻――だったと思います――の本を私は書きました」scripsi libros, puto, duos aut tres と実に曖昧な言い方をしている。

この曖昧さは「キケロとかいう人」（『告白』三・四・七）の曖昧さに通じているのか。

一般に、人はその青年時代の記念すべき処女作が二巻（duo）なのか、または三巻（tres）なのか忘れるものであろうか。

また、この処女作が今は失われてしまったことを記す際の、次の言い方も不思議な響きを伴っている。

「どのようにしてかはわかりませんが、私たちのもとを離れて迷子になってしまいました（aberrauerunt a nobis nescio quo modo）」（『告白』四・一三・二〇）。

もしかして、この処女作『美と適合について』De pulchro et apto は、実際には、手元に在ったのではないかと推測する学者（加藤武）もいる。ただ、その書はマニ教的な色彩で彩られていたため、表に出せなかったのでは、と。

それとも、アウグスティヌスは忘れっぽい人で、『告白』執筆の二〇年ほど前に書いたこの書が「二巻かまたは三巻か」を本当に忘れてしまったのか。

アウグスティヌスがカルタゴでアデオダトゥス（Adeodatus）の母と出会ったのは、彼がマニ教に入信する前の一六歳の頃のことであり、三一歳で彼女と離別するまで、互いに愛し合いながら、幸せに暮らしていたはずである。[20]

彼女はきっと胸騒ぎをおぼえさせるほど美しい人（pulchra）であったろう。もちろん、ただ単に外面的にではなく、内面的にも。

もしかして『美と適合について』De pulchro et apto には、彼女の記憶の断片が映っていたのか。

それはまったくわからない。

わかっているのは、『神の国』第二二巻においては、総じて、美しい人（pulchra）の映像は、奇跡物語が最高潮に達する、若い、たぶん貴族のパラディア（Palladia）（『神の国』二二・八）の上にさえ、ほんのひとかけらも投影されていないことである。

アウグスティヌスがかつて愛した人はけっして貴族ではなかった。彼女は、アウグスティヌスが正式に結婚できないほど低い身分の人であったと言われている。

第一、パウルスとパラディア（Paulus et Palladia）は恋人同士であったのではなく、また夫婦であったのでもなく、ただ、若い兄妹であったにすぎない。

美しい人（pulchra）の面影は、別れて以来、ひとときも薄れることなく、アウグスティヌスの記憶の奥底にいつも生き生きと躍動し、深く、まぶしく、はるかな微笑みをたたえる、なつかしい人として秘められていたであろうが、美（pulchritudo）について語る人生の最後の場面においてさえ、読者に対して、ほんのかすかにほのめかされることもなく、沈黙のままに通り過ぎられてしまい、アウグスティヌスの死と共に、永久に滅び去っている。

もちろん、読者は残念に思う必要はなく、アウグスティヌスの基本的な構想に照らして、それでよいのである。

もしもアウグスティヌスの著作の中で、「美しい人」の面影を探すなら、それは、映像の中にではなく、アウグスティヌスが「あなたとは何か」との問いかけとの関係の中で「私とは何か」との問いかけを探求する『告白』の中での絶唱、「遅くに、あなたを私は愛しました」sero te amaui（『告白』一〇・二七・三八）と高らかに歌う歌声の中に潜んでいるのではないか。

「遅くに、あなたを私は愛しました。これほど古く、これほど新しい美よ、遅くに、あなたを私は愛しました」。

私はかつて別の論考[21]の中で、次のように論じた。

「日本語での諸訳を読みなおすだけでも、その「遅さ」が伝わってくる。

「嗚呼、遅き物かな遅き物かな。…さてもおそき物かな」（『ぎやどぺかどる』）、「おそかりしかな」（山田晶訳＋加藤武訳）、「あまりにもおそかりし」（山田晶訳）、「なんとおそかったのでしょうか」（加藤信朗訳）、「あまりにも遅すぎました」（宮谷宣史訳）、「おそかった」（松崎一平訳）。

では外国語訳ではどうか。

たとえば、Patrice Cambronne によるフランス語訳[22]でも、一〇・二七・三八は Le chant de la mélancolie と題されている。加藤武によると、ここでは「あかるいなかにかげりをおびたテーマ 'sero' がひびきわたる。…かなしげな…母音の交替、くりかえされる半過去は、過去の追憶の哀切なしらべをかなでるのにふさわしい[23]」。

たとえ、どんなに「遅く」とも、アウグスティヌスが今、「これほど古く、これほど新しい美」を愛しているのなら、それでも十分間に合うような気がするのに、ここには何かしら取り返しがつかないような深い悔恨の響きが聞こえる。その響きに耳を傾けていると、まるで「愛する人」「美しい人」が今はもう手が届かないくらい遠くに去ってしまったか、または他界してしまったかのような気がしてくる。

声のかぎりに高らかに、またラテン語の技法のかぎりをつくして精妙に歌い上げられる sero te amaui の甘い歌声のどこかに、大切な誰かの死をじっと見つめるアウグスティヌスの視線が感じられてくる。

まるで、その人はアウグスティヌスを早くに、心から愛していたのに、アウグスティヌスはというと、神への愛によって初めて可能となる真の愛によって、その人を愛し始めるのがあまりにも遅かったとでも言うかのように」。

美の視点は、彼の処女作は失われたにせよ、アウグスティヌスの青年期から、中期の『告白』においてはもちろん、最晩年に至るまで、一貫して、生き生きと持続する最重要の根本的な視点であったと思う。

アウグスティヌスの若い日にひらめいた美についての着想は、彼の最晩年に至るまで、その輝きを失わなかったように見える。

この処女作について記した『告白』四・一三・二〇から、加藤武先生の訳文[24]により引用しよう。

「美しいものの他に、何をいったいわれわれが愛するでしょう。ではその美しいものとは何でしょう（Quid est ergo pulchrum ?）。さらにその美しさとは何でしょうか（Et quid est pulchritudo ?）」（『告白』四・一三・二〇）。

註

（1）金子晴勇『アウグスティヌスの恩恵論』知泉書館、二〇〇六年、一九頁

（2）自由意志の問題については、森泰男先生が、二〇〇四年一二月五日に、宮崎大学において開催された西日本哲学会第五五回大会において、「存在と悪――アウグスティヌスの「コンヴェルシオ」とプロティノスの「エピストロペー」をめぐって」と題して、シンポジウムを提題され、後に、『西日本哲学年譜』第一三号、二〇〇五年に掲載されている。甲斐博見先生が司会者となり、私は特定質問者を務めた。当時はまだお元気だった松尾雄二先生が学会の運営を担って下さっていて、シンポジウムの進行のためにも、入念なご配慮を賜ったことをありがたく思い起こす。

（3）参照、拙著『アウグスティヌスの探求構造』創文社、一九九七年に所収の第一章「『告白』冒頭の構造と「呼びかけ」」

（4）参照、拙論「アウグスティヌスの『告白録』における時間論の根源的な意味」『パトリスティカ』第一七号、二〇一三年

（5）山田晶訳『告白』中央公論社、一九六八年

（6）加藤武「INVOCARE――『告白』序章 I, i, 1. における――」『中世思想研究』第三六号、一九九四年、二二頁

（7）「暗い絵の構図」『パトリスティカ』第一一号、二〇〇七年

（8）加藤信朗先生が注目しているように――たとえば『アウグスティヌス『告白録』講義』知泉書館、二〇〇六年、第二講「第一巻冒頭の二行について」――、アウグスティヌスにとり、冒頭部はいつもきわめて重要である。

（9）「アウグスティヌスが見た最晩年の光景――『神の国』第二二巻を中心に」『長崎純心大学キリスト教文化研究所紀要』第一号、二〇一八年

(10)「暗い絵の構図」『パトリスティカ』第一一号、二〇〇七年
(11) 森泰男「アウグスティヌスとパイデイア――人間の自由意志をめぐる対立と和解の試み」九州大学哲学会シンポジウム提題での配布原稿、二〇一八年九月二九日
(12) 所収、S, T, デイヴィス『神は悪の問題に答えられるか――神義論をめぐる五つの答え』教文館、二〇〇二年
(13) 書評　J.Hick: *Evil and the God of Love* 1966（2nd ed.1985）、中世思想研究第二二号、一九八〇年
(14) 私は以下の研究を参照した。
宮谷宣史「アウグスティヌスにおける悪の問題」『悪の意味――キリスト教の視点から』新教出版社、二〇〇四年
宮谷宣史「人間と悪」『アウグスティヌスの神学』教文館、二〇〇五年
宮谷宣史先生の研究の意義は自身によりはっきりと主張されている。すなわち、アウグスティヌスにおける悪の問題を論じるにあたり、洋の内外を問わず、これまでは、必ずしも十分には注目されてこなかった『神の国』の第二二巻二二章以下に焦点を合わせつつ、このテーマに関する研究上での新しい局面を切り開こうとする試みとして、それは意義付けられている。
(15)「深淵」はアウグスティヌスの重要用語であり、人間の心の奥底の在り方を示している。
たとえば、『告白』では、「当時、私はまだこれらのことを知りませんでした。そしてより一層低い美しいもの（pulchra inferiora）を愛していました。そして深淵へと落ちていきました（ibam in profundum）」（『告白』四・一三・二〇）。
もう一箇所の profundum の用例もその少し後に見られる。
「人間それ自身が大いなる深淵です」（Grande profundum est ipse homo.）（『告白』四・一四・二二）。
参照、拙論「淵が淵を呼ぶ――『告白』一三・一三・一四」『パトリスティカ』第七号、二〇〇三年
(16)「暗い絵の構図」『パトリスティカ』第一一号、二〇〇七年
(17)「暗い絵の構図」『パトリスティカ』第一一号、二〇〇七年
(18)「私たちはこのことを、罰をこうむる私たちの醜さにおいて（in nostrae poenae deformitate）、経験しています」（『神の国』二二・二二）。そして、この「罰をこうむる私たちの醜さ（nostra deformitas）」と対比して、詩篇二六・八を引用して、「主よ、私はあなたの家の麗しさ（decus domus tuae）を愛しました」とも語られている。

すなわち、「（罰をこうむる）私たちの醜さ（nostra deformitas）」と、「あなたの（家の）麗しさ（decus domus tuae）」とが明確に対比されていたことが思い起こされる。

（19）参照『告白』四・一三・二〇

（20）参照、山田晶「アウグスティヌスと女性」『アウグスティヌス講話』講談社学術文庫、一九九五年

（21）「sero te amaui（『告白』一〇・二七・三八）の時制と人称」『東京学芸大学紀要』人文社会科学系II、第六六集、二〇一五年

（22）*Les Confessions*, Éditions Gallimard, 1998

（23）「美の讃歌――Conf.X, 27, 38――」『立教大学研究報告』〈人文科学〉第34号、一九七五年一月三〇日

（24）『アウグスティヌスの言語論』創文社、一九九一年、二〇頁「甫めての愛」

（東京学芸大学・哲学　特任教授）

テキストおよび章、節の分け方は以下に従う。B. Dombart; A. Kalb, Bibliotheca Teubneriana, Editio Quinta, Stuttgart 1981. なお、Corpus Christianorum Series Latina XLVIII, 1955. と*La Cité de Dieu*, Oeuvres de saint Augustin 37, Desclée de Brouwer, 1960は共にそれの第4版に従い、後者は節にアラビア数字を付けている。

テキストを翻訳する際に、主に参照したのは、アウグスティヌス著作集第十五巻『神の国』教文館、一九八三年である。第二一巻を岡野昌雄先生が訳され、第二二巻を泉治典先生が訳された。

この両先生と加藤信朗先生（「アウグスティヌスの聖書解釈をめぐって――『神の国』からの視点」『パトリスティカ』第七号、新世社、二〇〇三年）に、私は個人的にも大変お世話になった。

両先生の翻訳を私が、最小限度の範囲内で、やむをえず変更するのは、あくまでも、私の文体と文脈に合わせるためである。